地域振興課　信州暮らし推進担当課長　　山田　むつみ
課長補佐兼信州暮らし推進係長　仙仁　睦紀

”一緒につくる”「地域の教科書」－完成をゴールにしない取組の記録－

1.はじめに

「地域の教科書」をご存知でしょうか。

地域のルールや、言葉にしにくいけれど確かに地域の中で自然と受け継がれてきた考え方や人との関わり方を“ありのまま”伝えることで、これから先の安心につなげていくためのものです。

この「地域の教科書」は、完成された形を県が用意して地域に渡すルールブックではありません。地域の人自身が考え、悩み、言葉にしながら作っていくことに意味があります。だからこそ、県が一方的に作って押し付けるのではなく、地域の皆さんと一緒に作り上げる過程を大切にしたいと考えました。

そこで活用したのが、官民協働で取り組む「私のアクション！未来の NAGANO 創造県民会議プロジェクトチーム」でした。

ここでは、この協働のプロセスと、その中から生まれた「地域の教科書」のひな形とその作成の手引きについて、その考え方や生い立ちをご紹介します。

2.なぜ「地域の教科書」が必要なのか

移住相談や、実際に移住された方々と話をしているとこんな声を耳にすることがあります。

「自治会って、入らなきゃいけないんですか？」

「自治会費が思っていたより高くて、正直びっくりしました。」

結論から言えば、自治会への加入は必須ではありませんし、自治会費も理由なく高く設定されているわけではないことがほとんどです。ただ、そうしたことを十分に確認できないまま移住してきて、「聞きづらい」「波風を立てたくない」と気をつかいながら、モヤモヤを抱えてしまう方がいるのも事実です。「自治会」という言葉だけが、少しネガティブなイメージをまとって、独り歩きしているようにも感じられます。

また、「地域の人たちとの距離感を、どの程度保つのがよいのか分からなかった」という声もあります。困ったときはどのくらい頼ってよいのか、どこに頼れば良いのか、踏み込みすぎてはいけないのか、明確な基準が見えないまま、手探りで関係を築いているケースも少なくありません。そんな中、NPO 法人テダスが取り組む「集落の教科書」が話題に

なっていました。地域の決まりごとや暮らしの知恵、付き合い方のポイントなどがとても丁寧に整理されており、これがあれば、移住者と地元の方との間はもちろん、地元の人同士の行き違いも減るだろうと感じられる内容です。

一方で、
「必要性は分かるけれど、どこから手を付ければいいのか分からない」
「こんなにしっかりしたものは、自分たちには作れない」
といった声も少なくありませんでした。
良い事例があるからこそ、かえって作成のハードルが高く感じられてしまう…そんな状況も見えてきました。
さらに、伊那市では、全地区で共通のフォーマットを用いた「地域の教科書」を作成し、市役所の玄関近くに置いて、訪れた人が自由に手に取れるようにする取組が行われています。
こうした状況を踏まえ、地域の皆さんが最初の一歩を踏み出すためのヒントを、県で用意してみようという考えに至りました。

3.一緒につくる場としてのプロジェクトチーム

「地域の教科書」は、地域ごとに状況が異なり、一つの正解を示すことが難しいテーマです。そのため、県が単独で内容を整理し、形を整えるだけでは、地域の実情から乖離したものになるおそれがありました。
また、県が作成主体となることで、意図せず「正解を示すもの」と受け取られてしまう可能性もあります。地域の人が自分たちのこととして考え、使ってもらうためには、検討の段階から、さまざまな立場の声が交わる場が必要だと考えました。
そこで活用したのが、人口減少によって生じる様々な問題に立ち向かうために「私のアクション！未来の NAGANO 創造県民会議」の中の「プロジェクトチーム」という枠組みです。これは、課題意識を持った県民会議の参加者が集まり、自ら取組を企画・実行するもので、今回、４市村の移住推進担当職員、地域活動に関わる実践者など、立場や経験の異なるメンバーが集まり、皆でテーマを共有し、試行錯誤しながら考えることができる場でした。
結果として、このプロジェクトチームという“場”があったからこそ、正解を急がず、現場で感じている迷いや不安を出し合いながら、「ひな形」や「手引き」といった多くの地域で使える形へと整理することができたと感じています。

4.議論で見えてきたもの

さて、ここではどのような議論があったのかをご紹介します。プロジェクトチームは 12 月 23 日を皮切りに、全３回にわたりオンライン会議で行われました。

まず第１回は、NPO 法人テダスの田畑さんをお迎えし、「集落の教科書」が、良いことも悪いことも含めて地域の実情を伝えることで地域に関わりやすくすること、作成にあたって大切にしている姿勢や考え方、そしてプロセスのポイント等についてお話を伺いました。

そのインプットを踏まえ、

『移住者が地域になじむプロセスで、具体的につまずきやすい点は何か』

『その不安を解消するために、地域として提供できることは何か』

という二つの問いを大きな軸に、参加者それぞれが感じてきたこと、考えてきたことを出し合いました。

オンライン上で付箋にコメントを書いていく形式で議論を進めましたが、会議終了後も次々と付箋が貼られていくほど、参加者の思いがあふれる２時間となりました。

特に多く挙げられたのが、引っ越してきた際に挨拶をした方がよい相手は誰なのか、移住者が多い地域なのか、隣組の方が亡くなった場合、どのように情報が伝わるのかといった「近所づきあい・距離感の“正解”」に関する不安でした。あわせて、区とは何なのか、自治会費とは何のためのお金なのか、といった「自治会や区の仕組みへの疑問」、行事や共同作業への参加の優先度や、そもそも地区の行事自体が分からない、といった「行事や共同作業への参加ルール」と初動の難しさも多く挙げられました。

他にも、地元の人にしか分からない固有名詞や、冬に凍結しやすい道の場所、畔焼きの時期は洗濯物を干せないといった農作業事情など、「知っていれば戸惑わずに済む情報」を求める声も見えてきました。

また、不安とセットで、それを解消するためのアイディアも数多く出されました。例えば、「まず知っておきたいキーパーソンや支援団体を紹介する」、「自治をどう成り立たせていて、どんな作業があり、どれくらいお金がかかっているのかを示せば納得につながるのでは」、「年間行事について、参加の必須度をアイコンで表してはどうか」といった具体的な提案です。不安とアイディアが行き来する、手応えのある議論となりました。

続いて第２回は、第１回で出された不安を 12 のカテゴリーに整理し、参加者それぞれが考える優先度を持ち寄った上で、ひな形のドラフトを検討しました。上位に挙がった項目をひな形に反映していく一方で、「地域の教科書」は地域の実情に合わせ、地域の皆さんが自由に作るものだからこそ、上位に入らなかった項目もアイディアとして残したい、それぞれの項目に込められた思いが伝わる形にしたい、といった意見も出されました。

最終回となる第３回では、それまでの議論を落とし込んだひな形をもとに、完成に向けた最後の詰めを行いました。自治会費の内訳の分かりにくさや、キーパーソンの見せ方と個人情報への配慮、年間行事の載せ方の分量と工夫など、細部にまで議論が及びました。

参加者の本気さゆえ、ひな形を作っているというより、まるでどこかの自治会で実際に教科書を作っているかのように、それぞれが自分事として意見を出し合い、最後の最後まで議論は続きました。

5.メンバーはなぜ参加したのか

今回のプロジェクトチームのメンバーは、どのような思いでこの取組に参加してくれたのでしょうか。参加者それぞれに話を聞いてみると、立場や経験は異なりながらも、共通する問題意識があったことが分かりました。

例えば、移住相談の現場では、地域ごとに細かな特色があるため、既存の紹介カードだけでは伝えきれず、言葉で補足する中で行き違いが生じてしまう、そんなもどかしさを感じていたという声がありました。

また、移住前に「知っておきたかったこと」が、実は地元の住民の方にも十分に共有されていない現状に気づき、地域の教科書づくりの取組を参考にしたいと考えた参加者もいました。

実際に移住した立場からは、地元の人にとっては当たり前すぎて、あえて説明されることのないルールや慣習に戸惑い、「このままで良いのだろうか」という違和感を抱いていた、という率直な声も聞かれました。

メンバーの中には、すでに地域の教科書やそれに近いものを作成していた地域もありましたが、内容にばらつきがあったり、行政主導で作った結果として「行政が伝えたい情報」と「移住者が本当に知りたい情報」との間にギャップを感じるケースもありました。こうした状況を踏まえ、これを大幅に見直したい、という思いが参加の動機につながったという声もありました。

このように参加者それぞれが、移住の先にある「見えないルール」をどうすれば伝えられるのか、各現場で模索を続けていた一方で、その取組にまだ足りない何かを感じていました。そうした現場の率直な思いがあったからこそ、３回にわたる議論は、一つ一つを丁寧に確認しながら進める、当事者意識の高い有意義な時間になったのだと感じられます。

参加のきっかけはさまざまでしたが、いずれも「伝えるべきことが伝わっていない」という現場の違和感から始まっていました。

6.周囲の反応

このプロジェクトチームが始まったばかりの頃、「地域の教科書」のひな形づくりに向けた検討が進んでいることが新聞記事として紹介されました。まだ議論が始まったばかりでの掲載でしたが、「地域の教科書」というテーマそのものが、多くの関心を集めたように感じられました。

記事をきっかけに、「自治会の役員をしているが、不透明なルールがいくつもあり、何とかならないかと考えていた。ぜひ話を聞かせてほしい」と、比較的年配の方が県庁を訪ねて来られることもありました。

一方で、「地区の若い世代との隔たりなんて、簡単になくなるものではない」といった、率直で厳しいご意見をいただく場面もありました。

反応は決して一様ではありませんでしたが、世代や立場を超えて、地域のルールや人との距離感が「分かりにくいままになっている」ことへの違和感が、広く共有されていることを実感する出来事でもありました。

完成形や即効性のある答えを求める声だけでなく、「考え始めるきっかけ」や「話題にするための材料」を求める反応が多かったことは、この取組の方向性をあらためて確かめる機会にもなりました。

7.研修会で得た手ごたえ

こうして3回にわたる議論を経て、「地域の教科書」のひな形（様式・記載例）と作成の手引きが一旦出来上がり、お披露目の段階を迎えました。さまざまな地域、さまざまな立場のメンバーが思いを込めて作ったものを、単にホームページで公開して「ぜひ使ってください」と伝えるだけでは、この取組の締めくくりとしては十分ではありません。そこで、広く参加を募ってオンラインでの研修会を開催することとなりました。

研修会には、市町村職員をはじめ、地域おこし協力隊や集落支援員などの地域活動に関わる方々、このテーマに関心を持った一般の方など、3月の繁忙期にもかかわらず、約50名が参加してくださいました。

研修会の冒頭では、NPO法人テダスの田畑さんにも改めてご登壇いただき、「勝手に作らない」「押し付けない」「任せっきりにしない」「やりたい人が、できることをやる」「脱線する会話が、未来につながることもあるので脱線も楽しむ」といった、作成にあたって大切にしている姿勢や考え方を共有いただきました。これまでプロジェクトチームで積み重ねてきた議論の方向性は、間違っていなかったと感じられる場面でした。

そして、今回の中心となったのが「地域の教科書」についての説明でした。ひな形や記載例の具体的な内容に入る前に、作成の目的や、さまざまな立場の声を交えて作ることの大切さ、良いことだけを並べるのではなく地域の実情を“ありのまま”伝えるという考え方、完成後にどう生かしていくかといった点について、手引きに込めた思いを丁寧に説明しました。

研修会の最後には、「自治会も人手不足の中で、できるだけ負担を減らそうとしている。その中で『地域の教科書』を作ることが、新たな負担にならないだろうか」という率直な問いかけも寄せられました。正解のある問いではありませんが、こうした疑問が投げかけられ、参加者同士で共有されたこと自体が、この取組のテーマが現場の実感に根ざしたものであることを示しているように感じられました。

8.“一緒につくる”という遠回りを経て

ほんの3回にわたるプロジェクトチームでしたが、振り返ってみると、そこで重ねた議論の過程にこそ、多くの意味があったと感じています。

今回、プロジェクトチームというスキームを通じて、官と民が同じ立場で議論を重ねた

からこそ、地に足のついた形になったのではないかと思います。最初から正解を決めるのではなく、現場で感じている迷いや違和感を皆で共有することから始まったことで、最後まで安心して意見を出し合える時間になりました。その過程で、否定された意見は一つもありませんでした。そうして出された声は、形を変えながら、すべて手引きの中に反映されています。参加者一人ひとりが当事者として関わったからこそ、実現できたプロセスだったのではないでしょうか。

こうした議論を経てできあがった「地域の教科書」は、このひな形をきっかけに、今後、さまざまな地域で、多様な形に広がっていくものだと考えています。そして、この教科書に「完成」はありません。時間の流れとともに、地域の状況や大切にしたいことは変化し、そこに書かれる内容も、少しずつ更新されていくはずです。だからこそ、「完成させなくてよい」という気軽さを大切にしています。

まずはこの手引きを手に、今の地域のこと、これを作ってみた後の地域のことを、地域の皆さんで話してみてください。そして、必要性を感じたのであれば、無理のない範囲で、楽しみながら作ってほしいと思います。決まりはありません。自由に、できるところから取り組むのが「地域の教科書」です。私たちが作成した「地域の教科書」のひな形等が、そうした話し合いを始めるための一助となれば幸いです。

「地域の教科書」ひな形・
作成の手引き掲載場所